

堀
辰雄

窓



窓

ある秋の午後、私は、小さな沼がそれを町から完全に隔離している、〇夫人の別荘を訪れたのであった。

その別荘に達するには、沼のまわりを迂回うかいしている一本の小徑こみちによるほかはないので、その建物が沼に落しているその影とともに、たえず私の目の先にありながら、私はなかなかそれに達することが出来なかった。私が歩きながらいつのまにか夢見心地になっていたのは、しかしそのせいばかりではなく、見棄てられたような別荘そ

れ自身の風変りな外見にもよるらしかった。というのは、その灰色の小さな建物は、どこからどこまで一面に蔦つたがからんでいて、その繁茂の状態から推おすと、この家の窓の鎧よろいど扉は最近になって一度も開かれたことがないように見えたからである。私は、そういう家のなかに、数年前からたった一人きりで、不幸な眼疾を養っているといわれる、美しい未亡人のことを、いくぶん浪漫ロマンチック的に、想像せずにはいられなかった。

そうして私は、私の突然の訪問と、私の携たずさえてきた用件とが、そういう夫人の静かな生活をかき乱すだろう

ことを恐れたのだった。私の用件というのは、——最近、私の恩師であるA氏の遺作展覧会が催されるので、夫人の所有にかかわるところの氏の晩年の作品の一つをぜひとも出品してもらおうがためであった。

その作品というのは、それが氏の個人展覧会にはじめて発表された時は、私もそれを一度見ることを得たものであるが、それは難解なものが多い晩年の作品の中でもことに難解なものであって、その「窓」というごく簡単な表題にもかかわらず、氏独特の線と色彩による異常なメタフォルのため、そこに描かれてある対象のほと

んど何物をも見分けることの出来なかつた作品であつた。しかしそれは、氏のもつともみずから愛していた作品であつて、その晩年私に、自分の絵を理解するための鍵はその中にある、とまで云われたことがあつた。だが、いつからかその絵の所有者となつていたO夫人は、なぜかそれを深く秘蔵してしまつて、その後われわれの再び見る機会を得なかつたものであつた。そこで、私は今度の氏の遺作展覧会を口実に、それに出品してもらふことの出来ないまでも、せめて一目でもそれを見たいと思つて、この別荘への訪問を思い立つたのであつたが。……

私はようやくその別荘の前まで来ると、ためらいながら、そのベルを押した。

しかし家の中はしいんとしていた。このベルはあまり使われないので鳴らなくなっているのかしらと思いつながら、それをためすかのように、私がもう一度それを押そうとした瞬間、扉は内側から機械仕掛で開かれるように、私の前にしずかに開かれた。

夫人に面会することにすらほとんど絶望していた私は、私の名刺を通じると、思いがけなくも容易にそれを

許されたのであった。

私の案内された一室は、他のどの部屋よりも、一そう薄暗かった。

私はその部屋の中に這入はいって行きながら、隅すみの方の椅子から夫人がしずかに立ち上って私に軽く会釈えしやくするのを認められた時には、私はあやうく夫人が盲目であるのを忘れようとしたくらいであった。それほど、夫人はこの家の中でなら、何もかも知悉ちしつしていて、ほとんどわれわれと同様に振舞えるらしく見えたからである。

夫人は私に椅子の一つをすすめ、それに私の腰を下ろ

したのを知ると、ほとんど唐突と思われるくらい、A氏に関するさまざまな質問を、次から次へと私に発するのだった。

私はもちろん、よろこんで自分の知っている限りのことを彼女に答えた。

のみならず、私は夫人に気に入ろうとするのあまり、夫人の質問を待とうとせず、私だけの知っているA氏の秘密まで、いくつとなく洩もらしたくらいであった。たとえば、こういうことまでも私は夫人に話したのである。

——私はA氏とともに、第何回かのフランス美術展覧会

にセザンヌの絵を見に行つたことがあつた。私たちはしばらくその絵の前から離れられずにいたが、その時あたりに人氣ひとけのないのを見すますと、いきなり氏はその絵に近づいて行つて、自分の小指を唇くちびるで濡らしながら、それでもつてその絵の一部をしきりに擦こすつていた。

私が思わずそれから不吉な予感を感じて、そつと近づいて行くと、氏はその緑色になつた小指を私に見せながら、「こうでもしなければ、この色はとても盗めないよ」と低い声でささやいたのであつた。……

私はそういう話をしながら、A氏について異常な好奇

心を持っていているらしいこの夫人が、いつか私にもある特別な感情を持ち出しているらしいことを見逃みのがさなかつた。

そのうちに私たちの話題は、夫人の所有している氏の作品の上に落ちて行つた。

私は、さつきから待ちに待っていたこの機会をすばやく捕えるが早いか、私の用件を切り出したのである。するとそれに対して彼女の答えたことはこうであつた。

「あの絵はもうA氏の絵として、世間の人々にお見せす

ることは出来ないのです。たとえそれをお見せしたところで、誰もそれを本物として取扱ってはくれないでしょう。なぜと云いますと、あの絵はもう、それが数年前に持っていたとおりの姿を持っていないからです。」

彼女の云うことは私にはすぐ理解されなかつた。私は、ことによるとこの夫人は氣の毒なことにすこし氣が變になつてゐるのかも知れないと考え出したくらいであつた。

「あなたは数年前のあの絵をよく憶おぼえていらつしやいますか？」と彼女が云つた。

「よく憶えています。」

「それなら、あれを一度お見せさえしたら……」

夫人はしばらく何か躊躇ちゆうちよしているように見えた。やがて彼女は云った。

「……よろしゅうございます。私はそれをあなたにお見せいたします。私はそれを私だけの秘密として置きたかったのですけれど。——私はいま、このように眼を病んでおります。ですから、私がまだこんなに眼の悪くなかった数年前にそれを見た時と、この絵がどんなに変わっているかを、私はただ私の心で感じているのにすぎません。」

私はそういう自分の感じの正確なことを信じておりますが、あなたにそれをお見せして、一度それをあなたにも確かめていただきとうございます。」

そして夫人は、私を促す^{うなが}ように立ち上った。私はうす暗い廊下から廊下へと、私の方がかえって眼が見えな
いかのように、夫人の跡について行つた。

急に夫人は立ち止つた。そして私は、夫人と私とがA氏の絵の前に立っていることに気づいた。その絵はどこから来るのか、不思議な、何とも云えず神秘的な光線のなかに、その内廊だか、部屋だかわからないような場所の、

宙に浮いているように見えた。——というよりも、文字通り、そのうす暗い場所にひらかれている唯一の「窓」であった！　そしてそれの帯びているこの世ならぬ光は、その絵自身から発せられているもののようにであった。あるいはその窓をとおして一つの超自然界から這入^{はい}ってくる光線のようにであった。——と同時に、それはまた、私のかたわらににいる夫人のその絵に対する鋭い感受性が私の心にまで伝播^{でんぱ}してくるためのようにも思われた。

その上、私をもっと驚かせたのは、その超自然的な、光線のなかに、数年前私の見た時にはまったく気づかな

かったところの、A氏の青白い顔がくつきりと浮び出していることだった。それをいま初めて発見する私の驚きかたというものはなかった。私の心臓ははげしく打った。けれども私には、数年前のこの絵に、そういうものが描かれてあったとは、どうしても信ずることが出来なかった。

「あつ、A氏の顔が！」と私は思わず叫んだ。

「あなたにもそれがお見えになりますか？」

「ええ、確かに見えます。」

その薄明にいつしか慣れてきた私の眼は、その時夫

人の顔の上に何ともいえぬ輝かしい色の漂ったのを認めた。

私は再び私の視線をその絵の上に移しながら、この驚くべき変化、一つの奇蹟について考え出した。それがこのように描きかえられたのでないことはこの夫人を信用すればいい。よしまた描きかえられたのにせよ、それはむしろ私たちがいま見ているものの上に、さらに線や色彩を加えられたものが数年前に私達が展覧会で見たものであって、それが年月の流れによって変色か何かして、その以前の下絵がおのずから現われてきたものと云わな

ければならない。そういう例は今までにも少くはない。例えばチントレットの壁画などがそうであった。

——だが、それにしては、この絵の場合は、あまりに、日数が少なすぎる。数年の間にそのような変化がはたして起り得るものかどうかは疑わしい。そうだとすると、それはちょうど現在のよう、夫人の驚くべき共感性によつてこの絵の置かれてある唯一の距離、唯一の照明のみが、その他のいかなる距離と照明においても見ることを得ない部分を、私たちに見せているのであろうか？

そういうことを考えているうちに、私にふと、A氏は

かつてこの夫人を深く愛していたことがあるのではないか、そして夫人もまたそれをひそかに受け容いれていたのではないか、という疑いがだんだん萌きざして来た。

それから私は深い感動をもって、私の前のA氏の傑作と、それに見入っているごとく思われるO夫人の病める眼とを、かわるがわる眺めたのである。

日本文学電子図書館

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行



日本文学電子図書館